

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：11302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K03250

研究課題名(和文) 幼児期における感情の言語的理解の発達と保育・教育への応用

研究課題名(英文) Development of linguistic understanding of emotions in early childhood and its application to childcare and education

研究代表者

飯島 典子(Iijima, Noriko)

宮城教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：40581351

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、感情の言語的理解を注意の制御、感情語の獲得、確信度理解の観点から明らかにすること、配慮を必要とする子どもの発達支援のあり方を考察することを目的として行った。その結果、主に次のことが明らかになった。行動統制の困難さのある子どもは感情情報に注意を切り替えることが難しかった。感情の確信度と他者の感情理解、感情制御との間に正の相関がみられた。コミュニケーションの困難さをもつ子どもは、ネガティブな感情語の確信度を正しく評価することが難しかった。注視の制御、確信度を表す言葉の理解は、その力に焦点をあてて育成する必要があると考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、行動特性の困難さやコミュニケーションの困難をもつ幼児が苦手としている感情理解について、その背景となる発達メカニズムを検討した。その結果、感情理解の困難さであっても、行動統制の困難さのある子どもは注意の制御が関連し、コミュニケーションの困難さがある子どもは確信度といったあいまいな言語理解が関連しており、その背景に違いがあることを明らかにした点に学術的意義がある。また、効果的な発達支援は注意の制御や、確信度を表す言語獲得などそれぞれの苦手に焦点を当てることの重要性を示唆できた点で社会的意義があったといえる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to clarify the linguistic understanding of emotion in terms of attentional control, acquisition of emotion words, and understanding of uncertain others' emotional information, and to consider how to support the development of children who need consideration. The results revealed the following main findings.

(1) Children with behavioral control difficulties had difficulty switching their attention to emotional information. (2) There was a positive correlation between confidence of others' emotion, understanding of others' emotions, and emotional control. (3) Children with communication difficulties had difficulty in correctly evaluating the certainty of negative emotional words. (4) It was considered necessary to focus on and cultivate the ability to attentional control and to understand words that express certainty.

研究分野：発達心理学

キーワード：注意の制御 感情語 確信度 特別支援保育 幼児

1. 研究開始当初の背景

他者より良い関係を保ち社会に適応するためには、他者の感情理解に基づいた行動が重要である。近年、他者の感情理解の発達には実行機能が関わっていると考えられている。実行機能の基盤は脳の前頭葉にあるとされ、高次の認知的制御および行動制御といった重要な役割を担っている。実行機能と心の理論に代表される自分とは異なる他者の考えや行動を推測する能力は幼児期から同時的に発達することから、注目する対象を自身から他者へと制御する実行機能の発達によって他者の感情を正しく推論できるようになると考えられている。

発達障害などの診断はなされていないがクラス活動や仲間関係で困難さをもつ、いわゆる「気になる」子ども・児童は感情理解に困難さがあることが明らかになっている(飯島・本郷ら, 2018)。「気になる」子ども・児童の行動特徴のひとつは注意の制御の困難さにあり(本郷・飯島ら, 2005)感情理解場面で対象を選択し注意を制御できないことが関係していると思われる。感情理解は幼児期からはじまりその力を高めていくことから、発達過程を踏まえた支援が重要である。むしろ適切な支援がなされないと学習意欲の低下や否定的な仲間関係の構築など二次的な問題へと発展する可能性がある。

感情理解は直感的理解と認知的理解があり、後者には言語発達が大きく関係している。他者の感情理解に困難さをもつ自閉スペクトラム症児は感情の直感的理解はできないが、因果関係を言葉で説明できるようになると言語的理解が可能になる(別府・野村, 2005)ことから、感情の言語的発達は促進することができると考える。さらに平成 29 年度告知の新学習指導要領改訂において道徳の特別教科化に伴い道徳教育の改善が目指され、小学校では言葉による感情の理解と表出の育成が重視されていることから、典型発達児と「気になる」子どものいずれも幼児期からの発達段階に応じた感情の言語的理解を促進する保育・教育が求められる。

感情語の獲得は一般的な言語獲得と同様に対象へ注意を共有し、それにラベリングされることで学習する。感情語を多く持つ子どもほど他者の感情をよく参照し、感情状態を説明することから、感情語の獲得には感情を表出する対象を選択して注意を制御する力が影響し、感情語の獲得が感情の言語的理解に影響すると推察される。

次に、幼児の感情表出の発達は次第に抑制するように変化するため、表情などの感情情報はあいまいになっていく。このときあいまいを捉え「たぶん」「ぜったい」といった確信度で感情情報を強めたり、弱めたりして捉えることで、感情の言語的理解を高め状況に応じた行動ができると考える。

一般的な幼児期の言語学習の場は、日常における他者との関わりを通じた実践的な学習と絵本といった教材を通じた課題焦点型の学習が行われる。とりわけ「気になる」子どものように感情理解の苦手さが日常における実践的な学習を難しくしている場合には、教材を活用した課題焦点型の学習が有効に働く。保育場面、教育場面で活用可能な、よりよい教材を研究し効果的な支援方法の検討が求められる。

以上のことから、感情の言語的理解は注意の制御、感情語の獲得、確信度理解が連関していることが予想された。それらの発達段階に応じた保育・教育、発達支援のあり方を考案する必要があると考えられた。

2. 研究の目的

本研究は、感情の言語的理解を注意の制御、感情語の獲得、確信度理解の 3 つの次元で捉え、その関連から発達メカニズムを検討し、典型発達児と「気になる」子どもの発達段階に応じた保育・教育および発達支援のあり方に応用可能な知見を得ることを目的としていた。

「気になる」子どもは他者の感情理解に困難さをもち、それが社会的適応に大きく影響していることが明らかになっている。そのため幼児期からの支援が求められるが、これまで他者の感情理解とその背景となる認知能力との直接検討はなされておらず、効果的な支援方法の検討も不十分である。そこで、本研究は感情の言語的理解に着目し、その発達に影響を及ぼす因子を注意の制御、感情語の獲得、確信度理解と想定し、発達連関を検討することで、「気になる」子どもの感情理解の発達を促す支援プログラムの開発を目指していた。

3. 研究の方法

本研究は、2023 年に 5 歳児を対象に次の 3 つの調査を行った。

- (1)感情の言語的理解の発達に影響を及ぼす因子として想定した、注意の制御課題、感情語理解課題、確信度理解課題を幼児に実施しその反応を検討した。

注意の制御課題

シフティング課題、ストループ課題は、タブレット PC の画面に刺激を表示し、幼児が提示された刺激に正しく反応できるかどうかを測定した。ワーキングメモリ課題は順唱と逆唱を行った。

感情語理解課題

画面に提示した絵をもとに短いストーリーを幼児に話し、クイズ形式で登場人物の感情を 3

つの中から1つ選択するよう求めた。ストーリーの内容にあった感情語を選択できるかどうか正答数を得点とした。なお、選択肢には登場人物の表情も示されていたが、怒りと驚きなど類似する表情が並べられ、表情だけでは選択できないように構成されていた。

確信度理解課題

画面に提示された絵をもとに短いストーリーを幼児に話し、クイズ形式で登場人物の感情の確からしさを4段階(「本当でない」から「本当である」)で評定するよう求めた。

- (2) クラス担任に、先行研究(本郷ら, 2003、本郷・平川ら, 2021)を参考に作成した幼児の感情表現(言語的表現、共感など7領域20項目で構成)と行動特性(「気になる」子どもの行動特徴17項目)に関する質問紙に評定を求めた。この評定結果から、「気になる」子どもの抽出と、の結果との関連を検討した。
- (3) 感情が描写された絵本の読み聞かせ、および幼児の絵本作成活動といった保育実践を行い、で抽出された「気になる」子どもへの支援効果について、保育場面における他児との関わりを記録し、自己および他者の感情言及場面を抽出して検討した。

4. 研究成果

(1) 幼児の感情表現、行動特性と注意の制御課題との関連

感情表現および行動特性と注意の制御との間の相関を求めたところ、行動特性は注意の制御と負の相関がみられ、感情表現は感情抑制 感情理解 共感 と注意の制御のうちストループ課題にのみ正の相関がみられた。そこで、ストループ課題成績の高群、低群を比較したところ、感情理解 において低群は高群よりも有意に評定が低かった。ここから、ストループ課題に必要な注意の切替の弱さが他者の感情理解の困難さに関連していると考えられた。

(2) 感情語理解課題

5歳児は登場人物の感情を推測し正しく感情語を選択することができていた。その成績に行動特性との関連は認められなかった。ここから、「気になる」子どもは、絵本など自身が関与しない状況では登場人物の感情が生起する要因を捉え、どのような感情状態か正しくラベリングできる力を持っている。しかし、自信が関与する実際の場面になると他者の感情に着目することができず、他者の感情を正しく理解し状況に応じた制御ができないのではないかと考えられた。

(3) 確信度課題

確信度と行動特性との関連：ネガティブ感情の確信度と行動統制の困難さ特徴、コミュニケーションの困難さ特性の評定得点との間に負の相関が認められた。確信度理解はネガティブ感情をより苦手に行っていると推測された。

行動特性タイプ間におけるネガティブ感情の確信度の差(図1)：行動統制の困難さ傾向のある子ども群と、コミュニケーションの困難さ傾向のある子ども群の確信度(4段階評定)の差を、ネガティブ感情語(悲しい)の「思う」「はず」「らしい」「かもしれない」の4つで比較すると、「思う」「はず」「らしい」において、コミュニケーションの困難さ傾向のある子どもが有意に低かった。

確信度と感情理解：ネガティブ感情の確信度は感情抑制 感情理解 の評定との間に、ポジティブ感情の確信度は感情理解 の評定との間に正の相関が認められた。ここから、確信度を正しく評価できることにより、他者感情を適切に理解し、感情抑制を發揮しやすくなるのではないかと考えられた。

行動特性高低群と確信度との関連

コミュニケーションの困難さの高低群間には、ネガティブ感情の確信度に有意な差が認められ、低群はネガティブ感情が生じていることの確信度が低い傾向にあった。コミュニケーションの困難さをもつ「気になる」子どもは、他者のネガティブ感情への確信度が低く、感情が生起していないと捉える傾向にあることが、「他者の気持ちが分かっていない」状況に繋がると考えられた。

絵本を活用した発達支援

感情をテーマにした絵本の読み聞かせを計画的に行うことで、多くの幼児は感情をより言語化するように変化したが、行動統制の困難さやコミュニケーションの困難さをもつ幼児には

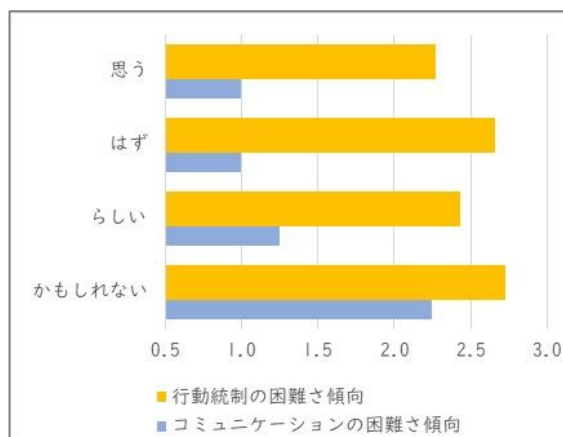


図1 行動統制の困難さ傾向のある子どもとコミュニケーションの困難さ傾向のある子どものネガティブ感情における確信度の平均値の差

効果が無かった。ここから、他者の感情理解に困難さをもつ「気になる」子どもの発達支援においては、注意の制御や確信度を表す言語獲得に焦点をあてたプログラムが必要になると考えられた。

5．今後の課題

新たなデータの収集と再分析

本研究は以上のような研究成果を得ることができたが、本研究期間は新型コロナウイルス感染症の拡大防止期間であったことから調査実施が遅れ、十分なデータを得ることができなかった。調査方法の妥当性および結果の信頼性を高めるために、今後も調査を継続し、データを増やして再分析を行い、より説得力のある成果を発表していくことが課題として残った。

感情語ごとの確信度の検討

本研究は発達モデルを検証することが目的であったことから、注意の制御課題、感情語理解課題、確信度理解課題の3つを、ほぼ同時期に行う必要があった。そこで、確信度課題では幼児の負担を軽減するよう「うれしい」「かなしい」の2つの感情語についてのみ調査を行った。研究デザイン時の想定では、「気になる」子どもは感情語の種類に関わりなく確信度をうまく処理できないと考えられた。その理由は、確信度をより正確に処理できるようになるのは児童期であるため、あいまいな表現がつくと一定して確信度が弱められると考えたからである。しかし、本研究の結果では、コミュニケーションの困難さ傾向のある子どもはネガティブ感情語においてのみ確信度が弱められる傾向にあった。また、明確な差を検出できなかったが、行動統制の困難さのある子どもはポジティブ感情の一部の確信度を強める傾向がみられたことから、幼児期にも確信度によって理解を強めたり、弱めたりする萌芽があり、感情語によってその発達が異なる可能性があると考えられる。これは、快、不快から分化する基本的情動が、快よりも不快の方が早く分化されることから予測可能である。今後は、基本的情動を表す他の感情語についても検討することで、感情の言語的理解の新たな側面を検討していく必要があると考えた。

6．引用文献

- 別府哲・野村香代(2005)高機能自閉症児は健常児と異なる「心の理論」をもつのか：「誤った信念」課題とその言語的理由付けにおける健常児との比較．発達心理学研究 16(3), 257-264.
- 飯島典子・高橋千枝・相澤雅文・本郷一夫・平川久美子(2018) 児童期の情動発達とその特異性に関する研究 11．日本教育心理学会総会発表論文集, 354-354.
- 本郷一夫・飯島典子・杉村僚子(2005) 保育の場における「気になる」子どもの保育支援に関する研究．東北大学大学院教育学研究科教育ネットワーク研究室年報(5), 15-32.
- 本郷一夫・平川久美子・高橋千枝・飯島典子(2021) 幼児期における情動発達と行動特徴との関連．発達支援学研究, 2(1), 41-58.
- 本郷一夫・澤江幸則・鈴木智子・小泉嘉子・飯島典子(2003) 保育所における「気になる」子どもの行動特徴と保育者の対応に関する調査研究．発達障害研究, 25(1), 50-61.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 平川久美子・本郷一夫・飯島典子・高橋千枝	4. 巻 33
2. 論文標題 幼児期における情動発達の特徴：年齢と性による違い	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 石巻専修大学紀要	6. 最初と最後の頁 71-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯島典子・宍戸佳央理	4. 巻 1
2. 論文標題 幼児の感情表現を援助する保育実践-色を用いた感情表現活動の実践-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 宮城教育大学教職大学院紀要	6. 最初と最後の頁 111-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 飯島典子
2. 発表標題 幼児の自発的絵本読み行動と感情理解との関連
3. 学会等名 日本発達心理学会第34回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Takeyasu Kawabata, Yoshiko Koizumi, Li Xioping, Wang Chong
2. 発表標題 A Comparison of Factors Affecting Verbal Aggression Between Japan and China: Emotion and Politeness
3. 学会等名 PAPERS FROM THE INTERNATIONAL ASSOCIATION FOR CROSS-CULTURAL PSYCHOLOGY CONFERENCES (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 飯島典子
2. 発表標題 幼児の感情の言語的理解に関する研究2 - 幼児の好む絵本の種類と感情理解との関連
3. 学会等名 日本発達心理学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 飯島典子
2. 発表標題 幼児の感情の言語的理解に関する研究1 幼児の自発的絵本読み行動と感情理解に関する予備調査
3. 学会等名 日本発達心理学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	池田 和浩 (Ikeda Kazuhiro) (40560587)	尚綱学院大学・総合人間科学系・准教授 (31311)	
研究 分担者	小泉 嘉子 (Koizumi Yoshiko) (80447119)	尚綱学院大学・総合人間科学系・教授 (31311)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------